

戦場の悲惨さを伝えたい

● 成田東三丁目

太田 剛道

(大正九年生まれ)

終戦後、家内と縁あって結婚して以来の杉並在住だから、かれこれ四〇年以上になる。そんな私の戦争体験は、直接杉並区に関連するものではない。しかし杉並区に住んでいる私が、戦争体験を伝えるのも意義のあることと思ひ、敢て筆を執りました。

私は陸軍の北支派遣軍として、中国の山西省太原から運城に駐屯し、軍通信として、主に師団司令部に勤務しておりました。南方の戦況激化に伴い、濠北派遣軍に転属を命ぜられ、アンボンの軍司令部に行くことになりました。転属の部隊は少人数でしたが中支の済南、台湾の高雄、フィリピンのマニラを経由し、遙かオーストラリアの目と鼻の先にある、アンボン島に向けて出発することになりました。幸い途中は潜水艦にやられることなく、マニラまできたものの戦況は悪化し、なかなかアンボン行きの船は出ません。ようやく機会に恵まれて乗船した船は、マニラ湾外で見事米国の潜水艦の魚雷攻撃を受け、沈没してしまいました。海中に放り出された兵隊たちは、三々五々ばらばらに海に浮いていましたが、それも

見えるのは波の上に浮いている時です。

波のうねりの下にいる時は、周囲には誰も見えません。心細いものです。何時間たったことでしょう。そのうち救助艇が近づいて来るのが見えました。大勢の兵隊が固まっている所が優先されるのか、私の方ではなかなか来てくれません。海水の冷たさのせいか、小水が洩れました。それが衣服の中を伝っていくうちに暖かい体温を感じました。あ、俺は生きているのだと実感し、自分自身を励ましたものでした。救助艇に救われ、デッキの上で毛布にくるまり震えている私は見えないものを見てしまいました。五人や一〇人位ならいざ知らず、一人、二人が波間に浮き沈みしているのです。彼等は救助艇の方に泳いでくる力もないのか、きつとオーイ、オーイと声を上げているのだろうと思うが、船からだんだん離れて沖の方に流されてゆくのです。そのうち姿は見えずなくなりました。また助けられたものの、縄梯子はしこを昇りきれず途中海に落下し、再び浮かんでこない人もいました。

マニラに戻った私は、アンボン行きの船がないのでマニラ

防衛司令部に配属になりました。そこへマッカーサーの猛攻があつたのです。制空権の無い日本軍は、マニラ近郊の山中に逃げこみました。昼間は木陰で休養し、夜は移動です。食糧も直ぐ無くなり、戦意どころか、生き抜く算段に四苦八苦しました。夜の闇に乗じて山から下り、川を二つ渡って民家の庭に植えてあるカモテカボイ(タピオカ芋)を掘って、盗んで山に戻ってくるのです。星や月を目標に道なき道を歩き川を渡るのですが、川には流れがあります。一直線に歩いたつもりが相当流されて向こう岸に着きます。水量も胸のあたりを越えたらもう渡れません。川で流されたり、またフィリピン人の自衛団に撃たれたのでしよう、木の陰にうずくまっている人も何人も見ました。捕虜になって連れ出されたか殺されたか、一週間後にはその場所にいませんでした。

雨期に入ったのか、激しい雨が降る夜でした。仮住居の天幕小屋は、雨洩りが激しく寝ておられません。合羽を頭から被って大きな木の幹に背中をもたせかけ、立ったまま眠るよりほかありません。それでも疲れからウトウトしたことを今でも覚えています。

もう戦争も終期を迎えた頃です。もちろん何の連絡もない私たちは、そのような形勢になつていることも知りません。米軍の飛行機の飛ぶ回数も随分減つた程度で、山の中を放浪していたある日、沢づたいの道もない道を歩いている私は、座っている一人の兵隊を見かけました。

栄養失調でパンパンに腹は張っているが、顔は土気色で、

ひげもじゃの奥から目を大きく開き、私に向かつて両手を差し出し、一方の手を口にもつていくのです。何回も何回も力なくその挙動を繰り返すのです。きっと食糧もなく何日も何日も何も口へ入れてないのでしょう。食糧を恵んでくれと訴えているのは直ぐ判かりました。でも私は無視しました。その人への好意は即、私の死につながるからです。他人に食糧を譲れる余裕などありません。

三日後にその道を通りました。無残にも彼は死んでおりました。飯盒と鉄帽がころがっていて、鼻から蛆むしが出入りしていました。眼孔にも蛆が集まっていました。靴は誰かが持っていたのか履いていませんでした。異常に膨れあがった腹が異様と言うか、本当にむごたらしい有様でした。一瞬私は、たとえ少量でも芋の一片でも手を差し伸べてやらなかった自分を反省しましたが、戦争なんだ、死んでは駄目だと自分に言い聞かせて通り過ぎました。その日は終戦の八月一五日をとつくに過ぎた一〇月の二〇日ごろのことでした。

私の体験記

●方南一丁目

中川 慧

(大正一三年生まれ)

私は、終戦の時、満州国奉天省海城郡鞍山の第三航空情報連隊にいた。

内地からここに転属して来たのは、昭和二〇年のはじめである。厳しい冬が過ぎ、短い春も去って八月一日がやって来た。この日は、私の二一歳の誕生日である。

終戦のラジオ放送が始まったが「ガア、ガア…」と雑音が激しく内容が聴きとれないままに、「ソ連と戦争するんだ…」などと話し合っていた。

翌日、「ソ連が参戦し、日本が降伏した」とわかった時は、ただ信じ難い気持ちだけであった。やがて武装解除となり身の回りの整理など、あわただしい毎日が過ぎていった。

そして、私の中隊は、鞍山市にある満州第一の製鉄所の解体作業のため連隊を出発した。作業場所は、自動小銃を肩からつるしたソ連兵が監視しており、その中でのノルマで不安な日々であった。

ある日、突然中隊は原隊へ戻ることになった。やっと解放されたと思ったが、異国で戦いに敗れた私たちにそれはな

かった。

「明日、元の作業場所へ集合し、撤去した機械とともにシベリヤへ連行される…」と。

そこで中隊は解散し、逃避行を決断した。行く先は、連隊の近くにある「千山」といって、昔、匪賊がいたといわれる山へ逃げることになり、防寒衣類などを荷車に積みこんで連隊を後にした。道が狭くなり、車を捨て荷物を背負い、山に登った。夜になると、突然背後から銃声がした。ソ連軍かと思った。そのうち、こちらからも機銃を撃ちだした。

「他の飛行隊の連中が機銃を持って逃げこんだらしい」と誰いうとなしに伝わってきた。

それを八路軍が銃撃してきたのだ。幸いすぐに銃声もやんで、もとの静寂と闇にもどった。野宿をしたり、中国人の家に泊めてもらったりして山から出ると、無人の官舎らしい建物に辿りついた。

やっと一息と思ったのもつかの間、八路軍の攻撃をうけ、建物内に兵隊が乱入して来た。

私はとっさに、床下にもぐりこんだ。見ると、反対側の床の上から、殺気だった兵隊が銃口を私たちに向け「出ろ、早く出ろ」と叫んでいる。やむなく床下から出ようと首を上げたその時、銃声がおこり隣の兵隊がバツタリと手を着いた。私たちは追いたてられるように建物の外に連れ出されてしまった。

ようやく話し合いがつき、騒ぎはおさまった。翌日、私とAはこれ以上、一団となつて行動をすることに疑念をもち、かつてAが外出時に立ち寄ったことがあるという家に行こうと考へた。軍服を着て歩くのは危険なので、中国服に変装し鞍山の街へ向かった。

途中、マーチョ（馬車）に乗った八路兵や自動小銃をもつたソ連兵を見ると身を隠したり、中国人らしい素振りをして兵隊だと感づかれないようにしながら、やっとその家に着いたAと私は、家の人に事情を話すと快く二人を迎えてくれた。間もなくAは隣家へ移ったが、そのうちどこかへ行ってしまった。

私は、Aが移ってからそのご夫婦と三人暮らしであった。終戦で働く所もなく、いつ日本へ帰れるかもわからない混乱の中、見ず知らずの私を自分の息子のように面倒をみてくれた。そのご夫婦は、Yさんという人である。私はYさんの売り食いのお蔭で衣食住の心配はなかったが、たとえ少しでも思い、軌条や枕木を担いだりの線路作業員となつたり、肩から紐でつるした板の上に饅頭や煙草を並べ、街頭に立つた

りした。売っている品物を中国人に持ち逃げされても、どうすることもできない口惜しさにも耐えて、僅かの日銭を懐にした。

そのころ、街では元兵隊が銃を隠し民間人の家に匿かくまわれているという密告騒ぎがおこっていた。ある夜、三人で家かみにいと、八路軍が銃を構えて、土足のまま踏みこんで来た。

床下等を捜したが何も見つけだせなかつた兵隊は、Yさんを連行し出ていった。

何日か過ぎて、Yさんは無事に帰って来たが、手のひらには拷問の跡が残っていた。このような、八路軍の暴行や、暴民の日本人民家への略奪等は連日であった。

やがて中央軍の攻撃が始まり、鞍山市内も八路軍が逃走し中央軍の制圧するところとなり、間もなく引き揚げが開始された。

昭和二十二年七月二十六日、待ちに待った引き揚げの日、私は元軍人として集合することになった。異国での敗戦の混乱の中で、Yさんご夫婦に助けられ、生きて再び祖国の土を踏むことができる身の幸せを感謝し、内地での再会を約し別れた。

私は鞍山駅から貨車に乗り一か月後の八月二十八日、佐世保港に復員した。Yさんも舞鶴に引き揚げ、その後綾部市に居を構えて、私たちと行き来していたが、昭和四九年におばさんが、同五七年におじさんもそれぞれ他界してしまった。

今は家内ともども墓参りをして、私の人生の大切な人の思い出話をしています。

中国における私の軍隊生活

●久我山五丁目
中島 英吉

(大正一二年生まれ)

まえがき

昭和二年六月一〇日、即ち終戦の翌年、私は満州からの引揚第二陣として胡蘆島から門司に、日俘(俘虜)として帰還した。終戦時たまたま患者として病院にいたので、シベリアに抑留されず帰還出来たのである。

戦後四七年、日本の歴史の中でもこんなに長く平和の続いた時代はない。明治以降では日清、日露戦争、そして日中戦争、太平洋戦争と戦争が続いた。明治維新前でも内乱が絶えなかった。世界の歴史もしかり、今は核兵器の時代で大同士の戦争になれば広島、長崎の原爆の何百倍の悲惨な状態になるだろう。

軍隊入隊

私は昭和一八年一二月一日、現役軍人として麻布の東部第六部隊に入隊した。思えばずい分昔のことになるが、昭和一六年一二月八日、日本は太平洋戦争に突入し、当時の新聞やラジオも戦争のことで一杯であり、我々の毎日が戦争を切り離して考えることは出来なかった。街を歩けば必ず多くの軍

人に出会い、出征兵士を送る壮行会にもしばしば出会った。入隊して一週間で北支派遣となり、北支派遣軍楓二一連隊に所属した。

下関から釜山にわたり朝鮮半島を縦断して満州に入り、北支山東省の棗莊に約一週間で到着した。到着した時はちょうど夜であった。電灯はなくランプにお目にかかったのも初めてである。夕食に椀に盛られた赤い飯が出た。我々初年兵を歓迎するために赤飯を炊いてくれたと思ったが、翌朝それが高粱飯であることが分かった。高粱は中国では主食や飼料にする。初年兵教育は桑村という所で受けた。広大な農地に囲まれた農村である。軍隊という所は何事につけ絶対服従である。批判めいた言動は一切許されない、従って自由というものはない。

初年兵教育期間は三か月で相当きつい訓練をうけるが、不思議と教育期間が終わるころは体力もつき、肥えて来る。軍隊生活は規則正しいので健康にはよかったのであろう。

その間、幹部候補生を志願し合格した。やがて原隊に移動

命令が届き、合格した者数名を残して南方へ転戦していった。
石門幹候隊から入院

我々幹部候補生は河北省石門の北支歩兵下士官候補者隊で教育をうけることとなり、長い行軍の末現地に到着、昭和九年五月一日入隊した。幹部候補生教育は初年兵教育と違はかなり厳しいものであった。私の所属した六中隊は重機関銃隊であり六〇キログラム近い重機関銃を分解搬送したり、二人で引っぱりながら葡萄前進したり、炎熱の原野でのかなり厳しい訓練であった。水質が悪いので生水は飲むことを禁じられていたが、厳しい訓練で体力を消耗し、つい堪らず隠れて飲んでしまい下痢にやられる者が多数出た。私もその中の一人であった。

一〇月、教育隊最後の連合演習が北京近くの長辛店であり参加したが、最早消耗した体力の限界であったのか、そこで遂に北京陸軍病院に入院することとなった。病名は栄養失調であったが、そのうち右頸部淋巴腺が腫れて来た。しばらくして山海関近くの北戴河陸軍病院に移され療養することとなる。ここは中国で風光明媚な避暑地である。

一二月二〇日、見習士官任官の連絡が病院にあり、将校待遇となつて食事もよくなり体力も目に見えて回復して来た。

昭和二〇年四月、内地還送のため、奉天陸軍病院（今の瀋陽）に移された。が、既に朝鮮海峡は敵潜水艦が出没して輸送船の運航が出来なくなった。内地還送は中止となり、後方からも患者がどんどん送られてくるので大連陸軍病院へ移つ

た。ここで終戦を迎えることとなる。

俘虜生活

八月一日、これから重大放送があるから、ということとで病院で玉音放送を聞いたが、雑音が入つてその時は何のことやら分からなかった。

さてこれから我々はどのようなのだろう！いろいろな流言飛語が飛んだ。九月に入つてから突然ソ連軍から二四時間以内に移動準備を完了するようにと命ぜられ、軍医や看護婦は残つて、患者は海城に集結させられた。そこで俘虜生活が始まった。

満州にいた軍人は全てシベリアに抑留され、寒さや食事の悪条件の下で労働に従事させられた。

約八か月俘虜生活を送つたが、昭和二二年五月、ソ連軍から突然移動命令があり、多分帰国出来るのだろうと皆で話し合った。シートでリュックを作り、身の廻り品や寝るための毛布を一枚詰め胡蘆島に集結、そして帰国したのである。

むすび

これが私の軍隊体験である。自分のこの二年半の体験を顧みて、若し一步違った道を歩んでいたら、今日の私があつたかどうか分からないだろう。原隊は南方（ハルマヘラ島）へ転戦し苦戦したと聞いている。卒業した候補生も戦闘で多く戦死した。シベリアに抑留された軍人で死亡した者も数多くいる。運命とは誠に不思議なものと思つている。

だから戦争は再びあつてはならないのだ。

沈んだ輸送船

——ある小さな戦争体験より——

●西荻北二丁目

仁科 善郎

(大正一〇年生まれ)

戦争を体験した人なら誰でも感じた事と思うのだが、戦争で生きるか死ぬかということは全くの「運」であるように思われる。内地のような比較的安全な所においても死ぬ人は死ぬし、私たちのように戦争末期輸送船で南に渡り、その島で敵の上陸の寸前終戦となり、全く怪我一つせずに生きのびて、未だに世のきらわれ者として生活している者もある。考えてみればみる程「運」というもの、あるいは「つき」と言うものを感じるのであるが……。

* * *

台湾と比島の間ひろがる、当時よくいわれた魔のバシー海峡という海がある。別の言葉では内地から南へ向かう輸送船の墓場とも言われ恐れられていた――。

そして、その朝――突然の「やられたあーッ」と言う叫び声と同時に、船底から甲板に上る階段は兵隊たちの乱れた足音と先を争うぶつかり合いで騒然となった。私も一瞬自分の船に魚雷を受けたものと、無我夢中で後部甲板にかけ上った。そして一杯になった人の頭越しに海を見た。よかった！ 自

分の船ではなかった。激しい船内ディーゼルエンジンの音が狂ったように足元の鉄板をゆるがす。すぐ後にいた三本マストの旧式輸送船がやられたのだ。私が見た時、距離はもう数百メートルになっていただろうか。大きな黒い鮫の口許くちもとが海から突き出しているように、その船は直角にそのへさきだけが海面に残り、両側から次々に兵隊たちが海面に飛び降りている。こぼれ落ちるといった表現がぴったりである。その塊りはある時は激しくなり、次の瞬間一寸途絶えるのである。思わず時計を見る。午前七時八分――覚えておこうと心に思うのは、やはり戦場という意識の故か。

そして「凝然ぎょうぜん」という言葉はこのことを言うのであろうか。我々はひとことも発することなくこの悲惨な風景を眺めていた。そして本船ほか、生き残った船は全速逃避に移ったのであろうか。みるみるその距離は大きくなると同時に、そのへさきの部分は小さくなり、そしてそれからその船は全く海面から姿を没してしまった。そして今までの事が全く嘘のように、朝日がキラキラ光る水平線が残るのみだった。午前七時

一七分。随分長い時間が経って行くようでもあり、一瞬の魔の時間のようでもあった。

必死になって現場からとにかく逃げのびようとする数隻の船は、旧式な煙突から真黒な煙を潜水艦に対する警戒など全くおかまひなく吐き出しながら、比島の北端に向けて列を乱して走り続けた。船底のエンジンも破れよとばかりのフル回転に、その音と響きと振動に私たちは唯々祈るようにじっと堪えていた。

そしてその日の夕方、大きな湾の中に逃げのびることが出来た。それは比島のアパリという町の近くであるということであった。

波のない池のような浅い海の底には、珊瑚が岩一面に生え気持ちよさそうに泳いでいた。

一体これは何なのであろう。今朝方のあの悲劇的な時間は夢なのではないかと思うと同時に、魚雷にやられた船とその兵隊たちの命のはかなさを思わずにはいられなかったのである。

ふと湾の出口の方を見ると、チカチカ揺れる水平線の上を玩具のように小さな駆潜艇が二隻行ったり来たりしながら、私たちの船団を警戒していた。

——それは昭和一九年七月——日本敗戦の日から約一年前の事であり、私の戦争体験のほんの一こまである。

第九五八號

退去證明書

姓名 橋本 慧

大正十一年六月十五日生

原籍 東京都杉並區方南町

原職 聯合會社員


現住所 鞍山市中區芝八地一組

行先 埼玉縣入間郡

姓名	橋本 慧
生年	大正十一年六月十五日
籍名	東京都杉並區方南町
職名	聯合會社員
退去年月日	昭和十九年七月

右之者東北行營日僑管理處ノ命ニ依リ
民國三十五年 七月 退去セシコトヲ証明ス
中華民國三十五年 七月 主任 石

鞍山市日僑善後連絡



退去證明書

〈提供 中川慧さん〉